

【最優秀賞】 「ふるさと」

北杜市立須玉中学校

一年 比志 一葉

毎年、八月十四日に、私の家の近くの塩川をせき止めてくれた場所に、五百匹ほどのマスが放流されつかみ取り大会が行われる。私の住む比志地区には、中学生以下の子供は自分を含めて三人しかいない。だが、このマスのつかみ取りになると大勢の人々が集まってくる。故郷を離れて暮らす大人たち、その子供、孫、多くの人達が、この行事を楽しみにしている。

私に通っていた増富小学校は、この川の上流にある塩川ダム湖畔にある小さな学校だ。ダムの底に沈む小学校の代わりに新築され、昨年度末に二十四年の歴史を閉じた。ダム周辺は、春には色鮮やかな花が湖畔に咲き、秋にはダムに映る紅葉がすごくきれいだった。

塩川ダムは平成十年に完成した。洪水調節と合わせてこの地域にかんがい用水と水道用水を供給し、ダムからの放流による落差を利用した水力発電も行ない、水資源の有効利用を図ることを目的として建設された。実際にダムが造られてからは、台風などの大雨によって川が氾濫することもなくなつた。また、沢の水を水道水にしていた頃にはしばしばあった渇水による水道水のストップということもなくなつた。昨年、三月十一日の東日本大震災の時には、北杜市の多くの場所では翌朝まで停電になつたが、私の家の周辺は、塩川ダムの下流にある八巻発電所の電気を回してもらつたため、停電にならずに済んだ。それに、川の流れがゆるやかになつたため、毎年、七月中旬になると川辺一带にホタルが飛びかう。このように、このダムの恩恵をたくさん受けていることは事実だ。

しかし、良いことばかりではない。ダムが造られたがために失われたものもある。今年のつかみ取りが行われた次の日、私は父と川につかみ残されたますを取りに行った。マスを二匹とハヤを一匹つかまえ、楽しい一時を過ごした。この時、父がこんな話をしてくれた。

「この川には、ハヤ、カジカ、アマゴがいる。昔は、お兄ちゃん、お姉ちゃんと川に遊びに来て泳いだり、魚を採ったりして、遊んだ。でも、今は、泳ぐ所もないし、第一、川に下りることさえもできない。」
確かに、マスのつかみ取りのために準備された所以外は、まるでジャングルのように木や草が生い茂っている。しかも、小さいころ、唯一遊んでいた岩場もいつのまにか木に覆い隠されていた。ダムの放流は計画的に行われているため、川の流れが変わらず、水の流れがない所はこの何年間に大木が生えるまでになつてしまっているのだ。

八月十四日にマスのつかみ取りに来ていた大人たちもまた、この塩川で遊んだ人たちなのだ。単にマスのつかみ取りがあるから来るのではなく、あの時遊んだ所はどうなっているのかな、川の様子はどうなっているのかな、と思っ来ているにちがいない。もしかすると、川の姿が変わってしまったって驚く人もいるかもしれない。だが、この川に住む魚、虫たち、何よりも川に対する思いは、変わらないのだ。私の記憶にあるこの塩川は十年、二十年後どのようになっているのだろうか。マスのつかみ取りが行なわれ、大勢の子供たちが遊ぶ姿が見られるのだろうか。私にとって増富というふるさとと川への思いは強く結びついている。私はそんなふうに思う。